

第5回 海女サミット 2014 in 志摩

シンポジウム「海女の後継者」

会場：志摩市磯部生涯学習センター

平成26年10月25日（土）

主催 海女振興協議会

シンポジウム 14:30～

テーマ 海女の後継者

海女の減少、高齢化、後継者不足は深刻な問題となっている。その根っこは単に、海女だけの問題でなく、漁村の女性減少そして漁村の人口減少の問題である。そこで、今回は海女に焦点を絞って後継者問題の解決策を探ろうと試みる。

平成 26 年 10 月 25 日 (土)
志摩市磯部生涯学習センター

【報告】海女の現状と後継者



石原 義剛(いしはら よしかた)

1937年 三重県津市生まれ
1960年 早稲田大学文学部卒業
1960～69年 TV放送局勤務
1971年 海の博物館の創設準備を経て、開館とともに館長を代理
1973年 同館館長就任、現在に至る 現在、三重大学客員教授

【パネルディスカッション】海女の後継者をつくるために

コーディネーター



塚本 明(つかもと あきら)
三重大学人文学部教授

1960年、愛知県に生まれる。京都大学大学院文学研究科修了。専門は日本近世史。1995年に三重大学人文学部に着任。2008年頃から海女文化に関する共同研究と保全活動に着手する。海女協賛協議会副会長(海女文化委員の会)、海女研究会共同評議員(掛人)。

パネリスト



廣田 恵子(ひろた けいこ)
三重県雇用経済部長
1958年生まれ。名古屋大学経済学部経営学科卒。
1980年三重県庁入庁
2007年政策部東海九州対策室長
2010年総合事務局長兼副課長
2011年生活・文化部能力・生活分野総括室長
2012年東京事務所長
2014年雇用経済部長



植地 基方(うえだ もとまさ)
振興室室長

1967年、和歌山県新宮市生まれ。三重県育ち。東京水産大学(現東京海洋大学)を卒業後、1992年、三重県漁協同組合連合会に入会。指導員、出張員、出張員指導員を経て、2010年、漁協系新団体でつくる三重水産協議会水産振興室長(指導部業務)に就任。



和田 康紀(わだ やすのり)

三重大学人文学部
法律経済学科准教授
一橋大学法学部卒業。1992年厚生省入省。厚生労働省大官官舎企画を経て、2012年4月から三重大学人文学部へ出向。専門は福祉経済論、社会保障論。三重県雇用創出懇話会委員、三重県地域ジョブ・カード運営本部委員、みえメディアカルバレー企画推進会議委員、志摩市介護保険運営協議会委員を務める。



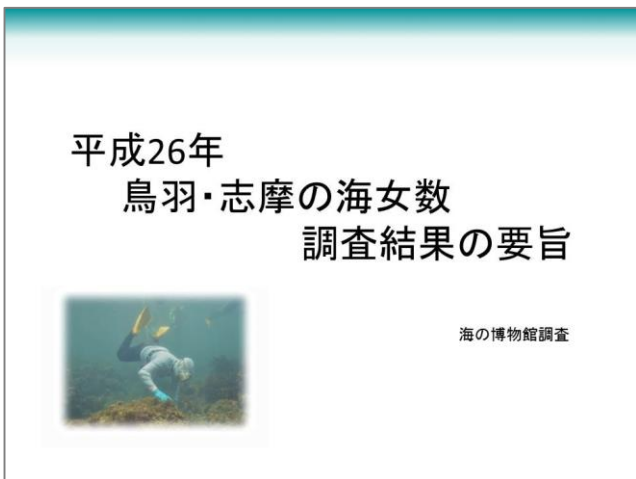
川又 俊則(かわまた としのり)

鈴鹿短期大学教授
1966年、茨城県生まれ。1997年成城大学大学院日本文化専攻修士課程修了。専門は社会学・社会学論・地域社会学。2005年鈴鹿短期大学に着任。主著『数字にだまされない生活統計』『生活コミュニケーション学を学ぶ』『ライフヒストリーの宗教社会学』など。

【報告】 ー海女の現状と後継者ー



ご紹介いただきました石原です。今回は、海女サミットの中に後継者の問題を取り上げさせてもらっています。私が実際に海女さんの各地域を歩かせてもらっていると、全国的に海女さんの後継者の問題があるように実感しています。それに対して、これから、その問題をどう取り上げていかなければならないのかという点を論議したいとこの場を用意しました。

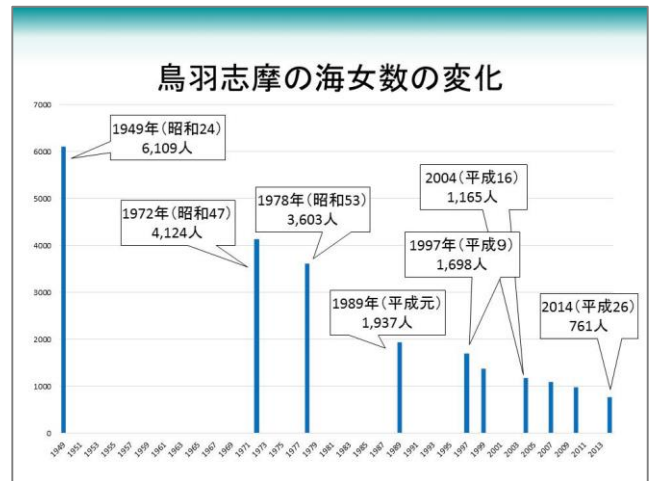


私は、今年の夏に「三重県における海女の数の推移」について調査しました。2010年に私共が全国の海女さんの数を調査した際には海女さんは2,174人いました。しかし、その後、全国調査は実施されていません。全国調査を継続することも必要だと思います。まずは、三重県の調査をやってみようと平成26年に綿密な調査をしました。

平成24年に海女振興協議会が設立され、その時に、鳥羽、志摩の海女さん全員に登録をお願いしました。それを受けて、昨年度、三重県の海女さん名簿が完成しました。そして、それに従い、本年度、数字の変化を個々に当たりました。

今日の前半は、海女さんの5年間の推移について。後半は、海女さんの現場を歩く中で、後継者問題についてどう考えているのか調査したことについて。その後、パネリストの方と、いかに増やすか、減らさないかということ論議したいと思っています。

まずは、平成26年度における鳥羽志摩の海女数の調査内容についてです。



海女数は明らかに減ってきています。グラフは定期的に海女数が計測されていないことも示しています。1949年(昭和24年)には6,109人の海女さんがいるという記録があります。本年度、2014年(平成26年)は761人。ほぼ1/10に減少しています。

昭和24年という時代は、第二次世界大戦終了後すぐ。漁村の女性が他の地域で働く条件が整っていなかった時代。当時のほとんどの若い女性が海女になっていました。この数字は、三重県としても過剰な数字を示している可能性もあるが、数字としては、これだけの海女さんがいたということは間違いありません。

それに対して、2010年(平成22年)の綿密な調査によると、鳥羽市565人、志摩市408人。合計973人という結果が出ています。

今年度は、鳥羽市505人、志摩市256人。合計761人。全体で212人減っています。減少率は21.8%。

海女の数

	鳥羽・志摩全体	鳥羽市	志摩市
平成22年	973人	565人	408人
平成26年	761人	505人	256人
減少	-212人 (21.8%減)	-60人 (10.7%減)	-152人 (37.3%減)

※志摩市の減少は鳥羽市と比べて大きい

鳥羽市のみの場合 60 人、10.7%の減少。志摩市は 152 人、37.3%の減少。なぜ、鳥羽市と比較して志摩市の減少率が高いのかと問われることもあります。今回の論点にもなってくると思いますが、その違いについて。まずは、操業日数についての違い。鳥羽市は年間 60～70 日位。志摩市は 100～130 日位。この操業日数の違いによる影響が大きいと思われます。操業日数が多い分、志摩市の方が海女さんの海女漁に対する依存度が高いと考えられます。鳥羽市は海女以外の様々な働き方が複合的にあることを表しているのではと考えられます。

男海士の数

	鳥羽・志摩全体	鳥羽市	志摩市
平成22年	298人	—	—
平成26年	288人	-27人	+17人
減少	-10人	—	—

※男海士も合計では減少している

次は男海士さんの数の変化について。平成 22 年の 298 人から本年は 288 人。最近、色々な方から男海士が増えていると言われてきましたが、実際には男海士も減少しています。鳥羽市は 27 人の減少。志摩市は 17 人の増加。合計 10 人の減少。

志摩市は海女さんの減少が著しいが、男海士は少し増加しています。ここにも、地区による考え方や海女漁の方法の違いが示されているのではないかと思います。

昨年度から本年度にかけて新規に海女漁に参入した人数について調査しました。各漁協の協力を得て、昨年度と本年度の海女名簿を基に新規参入者の人数

を調査しました。

海女の新規加入者(H25～H26)

※過去5年間の新規加入者は不明

	鳥羽・志摩全体	鳥羽市	志摩市
新規加入者	57人	46人	11人

※20～30歳以上の新規加入者は7人の為、多くが40歳以上である
 ※57人中、1地区に20人以上が集中しており、特別な事情があることも考えられるが、それを除いても30人以上の新規加入があった。

平成 25 年～平成 26 年の 1 年間における新規参入者数は、鳥羽市 46 人、志摩市 11 人。鳥羽志摩全体で 57 人の増加。その内 20～30 歳代は 7 人。多数は 40 歳以上です。

新規参入の海女さんに対する聞き取り調査によると、海女を始めた理由は、子育てが終わったから再度海女を始めた、他の地域から嫁に来て時間が経ったから海女を始めた等があります。

この 57 人の地区のうち、鳥羽市において 1 地区で 20 人増えている地域があり、その地区のカウント方法が前回と違った可能性があります。それを差し引いても新規参入者が 30 人は増加しているといえます。

海女の年齢

	鳥羽・志摩全体	鳥羽市	志摩市
平均年齢	65.2歳	65.0歳	65.9歳
20代の海女	5人	3人	2人
30代の海女	17人	7人	10人
最高年齢	—	86歳	85歳
80代の人数	51人	32人	19人

※一番多い年代は、鳥羽市60歳代166人・70歳代164人である。
 志摩市は70歳代96人。

海女さんの年齢に関しても調査しています。20 歳代の海女さんの数は、鳥羽市 3 人、志摩市 2 人。合計 5 人。これは 20 歳代の若い海女さんが少しでも最近現れていることを示しています。30 歳代は、鳥羽市 7 人、志摩市 10 人。合計 17 人。最高年齢は、鳥羽市 86 歳。志摩市 85 歳。

私共が 20～30 年程以前に漁村を調査していた頃には、何名か 90 歳代の方もいらっしゃったと思いますが、最近、数字の中に 90 歳代はいません。漁村で聞くと、90 歳になって磯に行くのは危ないという理由

で、娘や家族などが磯に行かせない場合もあるらしいです。そういった点がこの数字にも表れていると思います。80歳代の方は、鳥羽市32人、志摩市19人。合計51人。相当な数がいます。

また、どの年代が最も多いかについても調査しました。鳥羽市は60歳代が最も多く166人。次いで70歳代が164人。志摩市は70歳代が最も多く96人。

この数字は、本日配布資料の後ろに、詳細な年代別、年齢別、地区別の調査資料があるので、ご確認ください。

海女さんの後継者を増やす上での問題点について、漁村在住の方、漁村を離れた方等、漁村の事情を中心として、検討した結果を報告します。

まずは、中心漁獲のアワビが減り、収入が減っています。25年位前の地区の統計を見ると、海女さんが100万円稼いでいると、そのうち半分がアワビによる収入でした。昨年の結果は、アワビによる収入は25%にまで減っていました。トータルの収入額の変化は少ないですが、海女の漁獲による割合の変化が、若い海女さんの職業としての参入や現役の海女さんの存続についても大きな問題になっていると考えられます。

海女の後継者がなくなる

■海女の後継者の現状

→志摩半島の海女数が減少しており、さらに後継者は少ない。

①若い女性が海女にならない直接的な理由

- 1: 中心漁獲物のアワビが減って、収入が確保できない。
- 2: 海女の収入は不安定だ。(月や季節による収入巾が大きい。)
- 3: 3Kの仕事だという考えが抜けない。(一次産業は好まれない)
 - a. 酷い仕事
 - b. 危険な仕事
 - c. 汚い仕事
- 4: 海女である母親が勤めない。
- 5: 外部から海女を希望しても、漁業権の取得が難しい。

二つ目は若い人が海女を選択しない理由として、海女という職業の、収入の不安定さということが挙げられます。月や季節によって収入幅が大きいことに対する不安等が考えられます。

三つ目は海女の仕事は3Kというイメージが確立されてきました。きびしい。危険。汚い。そこが、若い人が海女を選択しない理由のひとつに上げられます。

これは、海女、漁業に限らず、一次産業全般に言えることだと思います。そういう判断がされてきた原因を我々は今後考える必要があると思っています。

今、この地区で、母親が海女なのに、娘を海女にするケースは少ないです。最近テレビ等で鳥羽の三世代海女が有名になっていますが、現実にはそういう海女

は少ないです。20歳代の海女が鳥羽志摩には5人いますが、地区で海女を継承している娘は3人。残りの2人は、他の地域から来て海女になりました。これは、海女の後継者をつくる上で、考える必要がある点だと思います。

昨年、「あまちゃん」の影響で、鳥羽市、志摩市や、海の博物館にも海女になりたいという問合せが多かったです。その際、海女になりたい若い人の受入可否をいくつかの地区の漁業組合に問い合わせました。その結果は、ほとんどの地区で難しいという答えでした。その地区に長く住み、結婚する等して、地域にずっといるという場合は可能かもしれないが、それでも、なかなか難しいという答えが多かったです。漁業権の取得との関連も大きな問題だと思います。

海女の後継者がなくなる

②若い女性が漁村に定住しない理由

- 1: 漁業以外に働く場がない。
- 2: 漁村は暮らしにくい。
 - a. 漁村はまだに男社会だ。女が大切にされない。(その根底には「漁村」の近代化が進んでいない。)
 - b. 漁村の女性は忙し過ぎる。(祖母や母の働く姿)
 - c. 自由な社会活動が出来ない。
 - d. 小中学校が無くなり、子育てに不安がある。
～(ほか多くの理由あり)
- 3: 都会への憧れ
漁村が暮らしにくいと考える裏返し
(昭和31(1956)年ころ、高校への進学率が50%を越えた。以降、高校を出ると就職先が都会(都市)にはあった。)
- 4: 配偶者を見つけにくい。

これからは、海女のみならず、漁村全体の問題点として挙げられる、今の漁村が若い女性を受入れにくい状況について報告します。

今の漁村は、基本的に男社会です。女性がまだ大切にされていません。漁村の現代社会への適応がまだできていない部分があります。

もう一つは今の若い女性の通常の見方の問題。漁村の女性、特に海女さんは忙しいです。休みもない。週末もきっちり休めない。現代の若い女性の希望とのずれがあります。

また、海女漁村から小中学校がなくなる問題もあります。若い女性が、そこに住んでいても、子どもの学校に困る場合、その為に引っ越すケースもあります。他にも漁村として人が定住しない理由は様々あると思っています。

反対に、都会への憧れは、まだ漁村地区の女性には強くあります。漁村に暮らして地域の学校を出た子が就職の際に、都会へ出ていきたいという意識があります。

また、漁村の中では配偶者を見つけにくい。その点は男性も困っています。それは、全体の漁村人口の間

題にも関わっているということです。

海女の後継者がなくなる

■海女がいなくなったら、どうなるか。

- 「漁獲」だけなら、海女がいなくなっても方法はある。
- 漁村から海女すなわち女性がいなくなったら、漁村共同体は成り立たない。

○緊急にとるべき方策

- アワビ資源の増加をはかる。
- 海藻やサザエ、ウニ(黒)など、海女による加工・販売をとる。

◎最近年の希望は

- 子育ての終わった若い女性が、少し海女をはじめた。
- 自然のなかで働く楽しさが理解された。

◎海女が海へ出られる(操業する)日数は多くなく、「専業」とする海女は少ない。

◎後継者問題は、単に海女だけでなく、漁村、地方全体の問題である。

では、海女がいなくなったらどうなるか？漁業という視点だけで考えると、海女がいなくても漁獲高ということだけで考えると当然成り立ちます。しかし、海女さんが担う重要な役割として、共同体を形成するという部分があります。そこをしっかりと押さえないと、海女さんの存在の意味を正確につかむことができません。

緊急な対策として、三重県の水産部門等もアワビ資源の増殖活動等によりバックアップしています。それにより、海女の収入を上げて、安定化させる取組みを行っています。

もうひとつは、三重県の特徴かもしれませんが、今までは、獲ったものをほとんど生で売っていました。今日獲ったアワビは今日売る。それを加工したり、販売したり他に収入を得ることはほとんどされていません。三重県では、海女振興協議会を中心に、石川県の「海女採り」を参考として、三重県の海女さんが獲ったものを「海女もん」というブランドとして、商標登録をする等の付加価値をつけていく取組みと共に、海女さんが漁をしている時間以外に、収入につながる時間を作る取組みも行われています。

その他、未利用資源の活用として、三重県と共にクロウニ等も海女さんの加工により、収入源として活用できるよう進めています。

最近の希望についてです。昨年1年間に海女さんが少なくとも30人新規に操業しました。それは素晴らしいことです。10年経てば300人増える計算です。それは現実的ではないかもしれませんが、希望が持てることです。

私たちが、この活動を続けていくことで、若い女性が海女漁に対して期待と興味を持ち始めてくれるのではないかと考えています。

新しく海女になった人達と話をしていると、海が好き、海で仕事がしたい、自然の中で仕事がしたいとい

う声を聞くことができます。それは、新しい芽だと思えます。この人達を受入れられるような漁村社会をどのように形成していくかということは、重要な問題だと考えるので、今後、大いに検討していきたいと思っています。

海女さん達は、機械に働かされているような仕事ではない、自然の中で体を使う仕事が楽しいという、そんな生き方を、海女という生業の中で気づいてくれていると思います。

私達がこれから考えるべきことは、海女を専業と捉える考え方についてです。成り立てば素晴らしいですが、獲る物の季節毎の変化や、漁村社会の中で女性としての役割もあります。子どもを産んで育てる等、この共同体社会を維持していくための役割があります。私は、海女さんが専業ではなくても、海の資源を利用しながら暮らしていけるような社会体制、産業の在り方をどう支援できるのかをみなさんと論議していきたいと思っています。

後継者の問題は、単に海女だけに留まらず漁村の問題でもあり、地方の問題でもあります。今後は、もっと広い目で、漁村、地域社会というものを考えながら、海女さんが一人でも増えて、自然環境の中で、みんなが生きていく社会ができればいいと思います。

今、流行りの言葉で、持続力のある社会、未来ということが言われます。英語ではサステイナブルなどと言われていますが、私は、日本語でいい言葉がないかと考えています。持続力のある地域社会が海女さんを核にしてできていったら、それは素晴らしいことだと考えています。

海女文化の核心は「海女」であり
海女の後継者づくりは緊喫の課題です。
みなさんの智恵をお貸ください。

海女振興協議会 石原義剛

ありがとうございました。

10月25日(土) 15:00~16:30

【パネルディスカッション】

—海女の後継者をつくるために—



【司会】

これより「海女の後継者をつくるために」と題しまして、パネルディスカッションを行います。ここからの進行はコーディネーターとして、三重大学人文学部教授、塚本明様にお願いします。よろしくお願いいたします。

【塚本】

こんにちは。三重大学の塚本と申します。



まず、簡単に今回の趣旨説明をします。今年、1月に鳥羽志摩の海女は、伝統的素潜り漁技術として、三重県の無形民俗文化財に指定されました。全国で初、大変めでたいことです。私は江戸時代の歴史学を専門としていますが、鳥羽志摩の海女漁は、古い歴史性を持っています。伊勢参宮文化との関係において、また日本の文化や産業においても、非常に重要な位置を占めていると思います。今回、三重県の文化財に登録されましたが、それにとどまらず、国の文化財、さらに

は、世界の無形民俗文化財として登録される価値を持っているものと考えています。

文化財というのは、社会の共有財産として長く保存するために指定するものです。しかし、海女漁、海女技術は、美術品や建物などと違い、物ではなく働く形、生業です。今の海女さんが年をとってやめると、いつか途絶えてしまいます。海女文化というものを残して、発展させるためには、後継者を育てなければならないという難しい問題があります。

しかしながら、先程石原さんの話にもありましたように、現実には海女さんの数が減少し続けています。その要因は、自然条件や制度、社会条件、経済的問題など様々ですが、環境資源の減少や気象の問題等、すぐには対策が講じられない問題もあります。少しでも問題解決に向けて前進できればと今回の企画を考えました。みなさんのお知恵をお借りして、海女文化の存続に向けて進みたいと思っています。

まずは、パネリストの方々に10分ずつ位お話をいただいて、その後、ディスカッションに移りたいと思います。

最初に鈴鹿短期大学の川又俊則さんにお話をいただきます。川又さんは現代の宗教問題などの社会学がご専門で、徹底的な聞き取り調査に基づいた緻密な分析で有名な優秀な学者です。また、海女研究会という会にもご参加いただいております、ミキモト真珠島で観光客を相手に海女の実演をする海女さんや、実際の海女さん達の聞き取り調査もされていらっしゃると思います。

では、よろしくお願いいたします。

【川又】

鈴鹿短期大学の川又です。よろしくお願いいたします。



今、ご紹介いただいたように、ミキモト真珠島で働く海女の方、鳥羽志摩の現役ベテランの海女の方に、2年前、たいへんお世話になりました。三重県下全ての海女の方、漁協関係者の方へ質問紙郵送調査をさせ

ていただき、その後、十数名にインタビューしました。私は三重県に来て 10 年目です。これからのお話は 2 年前の調査に基づくことです。ここにいらっしゃる海女・漁協関係者の方々と同じ結論であれば、それは次の議論につながると思っています。その調査で得られた「差」と「魅力」と「課題」という 3 つを述べます。

まず、「差」についてです。海女文化といっても、先程、石原さんがおっしゃったように、鳥羽市と志摩市では大きく違いますし、各市内でも地区ごと異なっています。私は、海女として潜っておられる日数が全然違うことを知り、とても驚きました。一年間で 2～3 日という短い方も、100 日以上潜るといいう長い方もおられ、漁をする日数が全然違うのです。この前提を無視した一括りでの議論は難しいでしょう。

また、年代の差も大いに感じました。インタビューした 60 歳代から 70 歳代後半の方々は、中学卒業後すぐに外部へ奉公に行き、その後、地元に戻って海女となり、50～60 年というベテラン海女のライフコースを辿っています。これに対し、50 歳代以下の方々は、高校以上に進学し、その後、就職し、結婚を機に地元に戻る方もいます。子育てが終わってから海女を始め、数年から十数年というキャリアの海女です。

このように同じ海女でも、そうなるまでの経歴も、海女としての経験も違います。これらが、「差」ということです。

次に「魅力」についてです。ミキモト真珠島で働く 20 歳代から 50 歳代までの方は、鳥羽市・志摩市出身の方も、県外から来られた方もいらっしゃいました。いずれも、「海女になりたい」という思いを持ち、職業として、潜りを「見せる海女」として働くことを選んだ方々です。地元でお祖母ちゃんやお母さんが海女という方もいました。その姿を見て、自分も海女になりたいと思っていて、結果的に、ミキモト真珠島で働いたそうです。県外出身者には、海が好きで、海の仕事をしたいと探しているうちに、ミキモト真珠島の存在を知ったという人もいました。「海女への憧れ」が、一定程度あるのだと思われます。

鳥羽・志摩のベテラン海女の方にうかがった海女の一番の魅力は、実力主義であること、つまり、自分一人で働き、稼げるという実感だそうです。

海女漁の技術は、それぞれにどんどん伸びます。海女 1 年目はあまり獲れず、それこそ「練習」という言い方をされていました。そして 2 年目、3 年目となり、徐々に海の中の様子が分かり、生き物のことが分かり、自分自身の実力など様々なことが把握できるようになります。漁の技術がレベルアップすると、実に様々なものがたくさん獲れるようになり、そうなる

と、ますます魅力を感じるそうです。このように漁のお話を伺っていると、私自身は潜ったことはないのですが、自分も海の中に入っているような気分になって、素敵な時間を過ごさせていただきました。

このような点で、海女という仕事は、自然を相手にし、常に変化し、目指すところに終わりが無いという所も大いに魅力的だと思いました。

先程の話にもありましたように、70 歳代や 80 歳代でも、現役の海女をバリバリにやってらっしゃる方がいます。大学教員である私たちは、60 歳代で定年を迎えますから、それこそ、その後、どう生活しようか考えないとはいけません。70 歳代や 80 歳代でできる仕事ということでも、とても魅力のある仕事なのだと思います。また、20 歳代で就いた仕事を続けた後、50 歳代後半に辞めて、それから海女を始めたという方も現実にいらっしゃいますから、海女は「セカンドキャリア」が可能な職業なのです。先程のお話にもありましたように、子育てが終わってから海女を始める方もいらっしゃいます。色々な年代の方が参入可能な職業なのは、魅力的な仕事だからだと言えるでしょう。

ただし、そこには幾つか「課題」もあります。1 点目は、東京への人口一点集中とも言える現状の、他地域の人口減少です。日本全国で人口問題を考える必要があります。特に、海女が活躍している地域は、人口が減少していますから、その地域でどうやって働いて生活するのが大きな課題です。

課題の 2 点目は、世間一般には、他にもさまざまな仕事があるなかで、漁業という厳しい仕事を選択し、継承する人がどれだけいるのかということです。海女は魅力のある仕事に間違いはありませんが、一方で、収入面での不安定さも否めません。ベテランの方から、昔はひと夏で何百万円分も獲れたが、今は数十万円とか、あるいは獲れないこともしばしばと伺っています。経済的に不安定さがある職業です。自分は海女をしていますが、子どもに海女を「させたくない」「させていない」という方が多いです。それは、このような経済的な不安定さが原因の一つでしょう。

これから、様々な専門家のお話があつて、その後、議論になるのかと思います。私は、その議論のポイントとして、2 点提案させていただきます。

1 点目は外部の方の登用・導入です。話は変わりますが、地域のお祭りを文化継承していく上で、人口減少の結果、現地の人だけで立ち行かなくなって、日程を変えたり、担い手を変えたりして維持している所は全国各地にあります。これを参考にするならば、海女文化を継承していくためには、地元の方々だけで展開するのは、難しいのではないかと考えております。外

部の方々を受け入れるには、当然ながら、技術の継承という課題もあると思います。ミキモト真珠島の場合は、先輩が後輩に「見せる海女」として、どのような潜り方がきれいに見えるのか、あるいは、どのようにしないと獲れないのかということ、事細かに教えてもらうそうです。もちろん本人の努力も必要です。デビューする前に、数か月間、徹底的な練習をするという話も伺っています。漁をする海女の場合、技術伝承はどういう形であるのかというと、ある意味、自分自身で盗んでということになるでしょう。もちろんそれが基本だとしても、それ以外の方法はないのかを議論する必要があるでしょう。

2点目は、多様な年代やキャリアの海女についてです。高齢から若年まで様々な年代の海女がいるのは、職業としてとてもいいことだと思います。しかし、海女だけをしていて365日生活するのは難しいことが明確ですから、その対応として、他の色々な仕事を組み合わせる必要があると思います。現実には、海女漁以外の漁をしている人も、ご夫婦で他の漁をしている方も、全く別の仕事をしている人もいます。それを個別ではなく、全体的に考え、人口減少のなか、地域でどうするのかを考えおく必要があるでしょう。

先程もご紹介いただきましたように、私自身は、現代宗教の調査研究もしています。そこで、「年金受給牧師」という言葉をご紹介します。キリスト教で、年金を受給している牧師ゆえに、教会員が少ない教会でも対応できているケースがあります。檀家の少ないお寺でも、年金をもらっているご住職だから継続が可能という場合もあるでしょう。「年金受給住職」と言えるかもしれません。

こういう例を考えると、「年金海女」という言葉が適切かどうか分かりませんが、年金をもらう年代の方々も海女ができると、あえて提案することもあり得るでしょう。多様な年代の組み合わせのなかで、実際にそういう形ですでに機能しているかもしれません。

以上です。ありがとうございました。

【塚本】

ありがとうございました。

続きまして、植地基方さんをご紹介いたします。植地さんは三重県漁業協同組合連合会の水産振興室という所にいらっしゃって、そこで、三重県の漁業の発展策を図る部署の室長をお務めです。漁業者全体の後継者を養成するお仕事にも携わっておられます。そういった具体的な事例から海女の後継者問題を論じていただきたいと思っています。

では、よろしくお願いします。

【植地】

ご紹介いただきました、三重漁連の植地と申します。よろしくお願いします。



先程、水産振興室ということをご紹介いただきましたが、この水産振興室というのは、漁協の系統団体、漁連や信用漁連等が水産振興を目指して2010年に作った団体でございます。その中の仕事の一環として「担い手対策」というのがございます。そこで、今日、少しお話をさせていただく、漁師塾という活動をしてまいりました。本来ならば、地元の外湾漁協さんや理事さん、漁業者さんなど、直接関わった方に報告をしていただきたい所ですが、今は、私からその一部をご紹介させていただきます。

この漁師塾というのは、現在3地区でやっています。一つは尾鷲市の早田（はいだ）という漁師塾で、これは、定置網の方々を主体にやっています。それから、津市の白塚という所。バッチ網を主体にやっています。これらの地域につきましては、基本的に雇われる形の漁業に携わる方々ですので、座学や研修等を中心にしていきます。

それで、今日お話するのは、畔志賀（あしか）漁師塾についてです。これは志摩市の地区で、海女漁が関係していますので、少しご紹介させていただきたいと思っています。もちろん、海女ということですので、基本的には、独立型、自営の漁業が中心となっています。基本的に、漁師塾自体は、現在、地元の後継者や指導していただく方も含めて、大体24名位で勉強会をしたり、あるいは研修をしたり、という場を定期的に持って活動をしているものです。もちろん、この漁師塾を発足させた一番の目的は、先程からお話が出ています、漁村地域の人口減少です。このままでは漁村がなくなってしまうのではないかと強い危機感のもと、若い方を受入れていこうじゃないか、という考え方を持って活動をしているところです。ちなみに、畔志賀漁師塾の「あしか」というのは、志摩市の畔名（あぜな）、志島（しじま）、甲賀（こうか）の頭文字をとって、畔志賀（あしか）となっています。この地

区のメンバーで活動していますが、この3つの地区それぞれ、就業の方の受け入れ方というのは違ってきます。

特に志島という地区につきましては、我々が、募集をするところからお手伝いをさせていただいていますので、ご紹介させていただきます。まず、地元の意向を受けて、この地区で海女を含む漁業者になりたい人を募集します。これは、全国漁業就業者確保育成センターや、三重県農林水産資源センター等のホームページに掲載したり、漁業就業支援フェア等に出展したりして募集しています。またホームページを見て、電話で問合せをいただくことも多いです。フェアの場合は、直接いらっしゃいますので、お話をさせていただきます。

漁師になりたいという方は、特に都会、大阪や東京に行くと必ずおられます。先程も館長からお話がありましたが、去年はテレビドラマがありましたので、その前の年よりも海女になりたいという方がたくさんお見えになりました。応募があればお話を聞かせていただくのですが、全ては聞けないので、まず、履歴書を送っていただき、地元の意向を確認しながら電話等で質疑を行い、一次選考という形にさせていただきます。問合せいただいて、強い意志を持って希望される方もたくさんいらっしゃいます。漁業の実態というのをしっかりと認識していただける方を募集していますので、自立心も必要ですが、地域の事情に溶け込んでいこうという意志が感じられない方は、一次選考の段階で、地元とお話をして断らせていただく場合もございます。地元とのしっかりした協議の中で、今後の研修に対応できそうにない、という感じの方はお断りさせていただいているという状況です。

一次選考を経て、実際に一度会ってみましょうとなったら、地元に来ていただいて、詳しくお話させていただきます。自営漁師という方法になりますので、自分の思い通りの働き方ができるのではないかなというような考えの方もいます。そういう方は、なかなか難しいと思います。最近では、特に去年あたりは、海女漁だけをしたいと希望される方が多いなと感じました。地元に来ていただいたら、面接をして少し研修をさせていただきます。地域の方としっかり話をさせていただいて、地元の人たちとの相性やその人の性格等を見せていただいて、地域の方もこの人ならいいのとはとなり、初めて、本格的に研修をスタートします。漁協が中心となり、地元の空き家等を探してそこに住んでもらいます。海女漁が中心ではありますが、海女だけではなく。漁期は限られていますので、その時期以外の過ごし方について話し合うことにもなり

ます。

現在、この地区では外部から男性の海士3名が定着、女性の海女が2名研修しているところです。この取り組みを通じて、地域の活性化につなげたいという思いがあつての活動だと認識しています。もちろん、県や国も様々な形で補助などを検討いただいています。我々もそういう要望もさせていただきますが、あくまでも、最終的には、漁業で生活ができるというところをしっかりと考慮してやっていくという形で進めています。地域の漁師のみなさんの理解や、地域全体の理解があつて、初めて、こういう活動ができるということを実感しています。

私はこの取り組みに携わらせていただいている、海女というのは、海女だけで生きていくのではなくて、地域に根付いた生活者としての姿の一つであるということ強く感じます。我々も、他の地区の海女さんともお話をさせていただく機会もありますが、みなさん、やはり地域の生活者として過ごされていらっしゃる。その中で、この仕事もされているということです。ですので、我々は、漁業の側面だけではない部分の支援やサポート等を色々検討していく必要があると感じています。

三重県は、今年の6月に「三重県漁業担い手対策協議会」を立ち上げました。私達も、それをお手伝いさせていただくことになりましたので、今日はみなさんのお話を聞いて、そういったことに少しでも役立てたいと思っています。男の海士さんのおっしゃっていた話ですが、「やはり、漁獲物を得ることに喜びを感じないと仕事はできない。」しかし一方で、「今、中心で活躍されている60歳代以上の方々がいなくなったら、少し世代間ギャップがあつて、僕らの時には、こういう地域形態でいけるのかな。」というような事を言われていますので、私達もそれをしっかりと認識して、今後仕事をしていきたいと思っています。以上です。

【塚本】

ありがとうございました。

3番目は、三重大学の和田康紀さんです。和田さんは2年半前に福祉経済論、社会保障論の教員として三重大学に着任されました。それまでは、厚生労働省の中央官僚として、医療、介護、福祉、年金などの政策立案に携わっておられました。現在は過疎地の医療福祉や雇用の問題にも取り組んでおられます。今日は、行政施策にお詳しいお立場から、また東京から三重に赴任されたお立場から、海女について考えていただきたいと思います。

よろしく申し上げます。

【和田】

ご紹介いただきました、三重大学の和田と申します。よろしくお願ひします。



今、ご紹介いただきましたが、私の生まれは新潟でして、大学から東京にいました。三重に来て3年目です。この中では、よそ者という視点でコメントを期待されているのかなと思っています。

ではまず、よそ者のコメントをさせていただきます。私が三重県に来て、三重県内で活動している海女さんの数を初めて聞いた時、当時は1,000人弱という話でした。それを聞いた時に私は、みなさんの思いとは逆だと思いますが、意外と多いなと感じました。他の県からみると圧倒的に多いですね。人口は、鳥羽市と志摩市を合わせると75,000人位だと思います。その内の1,000人という、海女さんの数は1%を超えています。それは、すごい財産だなと驚きました。先程、石原館長から、海女の高齢化が進んでいる、ニーズが減っているというお話がありました。これをどう見るのか？というのとは考えておく必要があると思います。

今、この瞬間だけを見ると、現在現役で働かされている海女さん達は、元気で活躍をされているわけです。海女としてこれからも働き続けるということは、元気で自立した生活を送るという高齢期の理想とする生活なのではないかと思っています。しかし、これから10年、20年経った時にどうなるのか？というのが今回の問題提起だと考えています。このことは様々な指摘がありましたように、海女だけの問題ではなく、この鳥羽志摩の地域全体で危機感を持って、みんなで共有していくことが大切だと思います。もちろん危機感というのは、高齢化が進むからダメということではなく、高齢化が進む中で地域の中で何ができるのか？という対策をみんなで前向きに考えていくことが必要だと思っています。今ここには、私の目を見て、すごく財産というか宝物がたくさんあるように思います。ぜひ、そういう財産を活かしながら、みんなで未来をつくっていくというメッセージがこの地域の中から発信できればいいなと思います。

本題の後継者の問題になります。女性のキャリアは廣田さんの本題だと思いますのでお任せしますが、特に若い女性の参画ということが難しい問題だと思いますが、避けては通れないので、戦略を立てて進めていく必要があると思います。

若い女性が働きたいと思う条件とは何か考えてみました。個人的には3つ位あると思っています。一つは、自分はこの仕事が好き、やっていて楽しいという自分の主観的な気持ち。もう一つは、それが周りの人に仕事が認められる、評価されるということも、とても大切なことだと思います。3つ目は、経済的にある程度メリットがあるということ。これも大事な事だと思います。3つの条件をいかに情報発信するのか、より良い物にするのかということが欠かせないことだと思います。

具体的に私も色々考えましたが、とりあえず、第1巡目ということで、大きな方法だけ3点指摘させていただいて、簡単にお話したいと思います。

まず、1点目。海女として働くことの楽しさや、この仕事が好きだということ伝えていくのは大切だと思います。現実には厳しい面も楽しい面もあると思います。逆に言うと、イメージでややきつい仕事、3Kのイメージが先走っている気がします。ぜひ、若い女性に、中学生高校生位の方にでもいいと思います。海女の魅力や、やりがいを伝えていっていただきたいと思っています。ずっと長年海女として働いてきた方は、私はどう生きてきたのか？どういう思いで活動してきたのか？等、自分の物語を多くの方に伝えて、語っていただきたいと私は思っています。

2点目です。周りの人に仕事が認められる、評価されるという事についてです。これはやはり、海女のことを海女以外の多くの人に分かってもらうという取組みですね。これは欠かせないと思います。海女だけで頑張るのではなく、地域を巻き込んで、日本全国に、世界に知ってもらうという仕掛けをどんどん作ってほしいと思います。

それから3点目です。経済的なメリットということですが、これは、一朝一夕にはできないことだと理解しています。収入をいかに増やしていくかということですね。収入を増やす取組みを、みんなで考えていく必要があると思います。例えば、先程のお話にもありましたが、生でその物を売るのではなく、地域資源を活用してどういうものづくりができるのか、とか、海女ブランドの商品開発、ここにも力を入れていくことが必要だと思っています。

このあたり、3点を論点として挙げさせていただいて、具体的な話は2巡目にしたいと思っています。

【塚本】

ありがとうございました。

では、4人の中で最後になります。三重県雇用経済部の部長、廣田恵子さんです。廣田さんは三重県内の雇用労働を管轄するお立場でいらっしゃいます。雇用経済部では、普段は企業の雇用問題等を中心に扱っておられると聞いています。今日は、その三重県の行政としてのお立場に加えまして、女性という観点から、女性の働き方についてコメントをいただければと思います。

よろしくをお願いします。

【廣田】

三重県雇用経済部の廣田です。よろしくをお願いします。



私からは、女性が働くという視点から、現状や三重県で行っている事業等の仕事、また、仕事を通じて課題と感じていること等について、少しみなさんにご紹介させていただきたいと思っています。

まずは、三重県で女性が働いている現状についてです。三重県においては、約6割の方が、結婚や出産のタイミングで離職するという現状があります。一方で、県民意識調査によると20歳代から30歳代の専業主婦の9割の方が働きたいと希望しています。もうひとつ、三重県の働く女性で非常に特徴的なことがあります。三重県の女性は、子どもができたら仕事を辞めて、大きくなったらもう一度働こうという意識を持っています。「就労中断型」という言葉で呼んでいます。そういうことを希望する方の割合が非常に高くなっています。これは、全国的に見ても、三重県の特徴的なことだと言えます。また、25歳から44歳までの女性の就業率が、三重県では72%ということです。全国平均が70%ですので、やや高くなっています。ただ、非正規労働者、正社員ではない方の割合が6割を超えていて、全国で44位ということです。正規と非正規の割合については、非正規の労働者の割

合が高いです。これも、三重県の特徴と言えると思います。先程もお話したように、子どもができたら一度辞めて、子どもが成長したらもう一度仕事に就くので、現実的には非正規の労働が多いという現状がそこからも見て取れると思います。子育て中の女性を対象にアンケートも実施しています。その結果によると、一度辞めてしまうと、もう一度社会に出て働くというところに不安がある。その要因としては、仕事と子育ての両立ということもありますが、精神的なものとして、仕事勘がなくなってしまう等、ブランクそのものが不安要素になるというアンケート結果も出ています。

石原館長からのお話にもありましたように、専門とする海女は少ないということにも通じるかと思いますが、多くの女性が子育て期においては、短時間勤務の柔軟な働き方を希望しています。企業側も労働力が少ないと言われている中、子育て中の女性が短時間で多様な働き方を希望しているのだったら、それに合うような働き方をさせていただけるといいなと感じていることが事実です。

女性のライフステージという視点で三重県では様々な仕事をしています。ひとつ事例をご紹介します。学生を対象にインターンシップの受入をしている企業等がありますが、今年、三重県では女性を対象としたインターンシップ事業を始めました。それは、先程お話させていただいた通り、子育てが終わって働こうと思った時、離職期間のブランクそのものが不安要素になっているため、まず、働くということについて座学で勉強してもらい、その後、実際に自分に合いそうな企業に行って実務研修を受けてもらいます。今年のだん員は30名でしたが、100名程度の応募があり、非常に競争率が高かったです。

その他、専門のキャリアカウンセラーによる相談会や就労支援セミナーも開催しています。また、県内のスーパーマーケット等の場をお借りして、出張相談会や面接会も行っています。

女性が働きやすい企業というのは、男性にとっても働きやすい企業だと思います。時間外労働が少ない、柔軟に対応してもらえる等、男女が共に生き生きと働いているような企業を表彰する制度も行っています。それに応募してくれる企業としては、現在は建設業が多いです。一般の小さな企業は、いいことをしていてもなかなか出て来ていません。それに関しましては、今後、募集方法等について検討していく必要があると考えています。

また、女性経営者の団体や漁協の連合会の女性部、商工会の女性部等の各種女性団体の方々と「みえ・花しょうぶサミット」というのを実施しています。そこ

で、今、共通の課題になっているのが若手や後継者不足の問題です。もちろん、企業側でもその問題があります。そこで、女性の視点を活かした企画等を行っています。

これからも、三重県はライフステージ毎の課題に対応したような施策を行っていきたくと考えています。

紹介になりますが、花しょうぶサミットの時にも話に出ましたが、鳥羽磯部漁協菅島支所女性部で「サメガール」というのが発足されました。女性ならではの視点で、アカモク美容効果をPRしたり、サメのたれの製作、販売を行ったりしています。女性の活躍という言葉もありますが、女性ならではの発想で様々な商品を企画する等、力が発揮できる場面もあると思っています。

海の仕事というのは、きついイメージが私の中にはありますが、その中で、海女さん達におかれましても、女性ならではの海の商品等が出てくるといいなと希望的なお話をして、終わらせていただきます。ありがとうございます。

【塚本】

ありがとうございました。

4名のパネリストの方々にそれぞれお話をいただきましたが、先程ご報告いただきました海の博物館館長の石原さんに、今までのパネリストの方々のご発言を受けて、他にも問題点等がございましたら補足していただければと思います。

【石原】

もう一度、少し発言させていただきます。



みなさんが、先程の私の報告をお聞きになって、悲観的にお取りになっているとしたら大変申し訳ないと思っています。今のパネリストの方々のお話も全部ひっくるめて、海女さんはやはり非常に可能性があると考えています。

海女さんの人数は昭和30年代の中頃位までに増えてきて最高になり、それからどんどん減ってきていま

す。それは、昭和31年に高校への進学率が50%に高まり、それと相反するような形で海女さんの数が減ってきています。それは当然だと思います。それまでは、働き場所の選択肢が少なかったと思います。ですから、逆に言いますと漁場に対する海女さんの圧力が強すぎて、現在における資源の枯渇につながっていると私は判断しています。現在は解消されてきて、これからと思ったところで資源がないと。それを今後いかに増やしていくかということを考える必要があると思っています。

鳥羽の人口が20,000人と少し位。その中に500人海女がいます。それは大変な数だと思います。海女さん達は、サラリーマンのような収入は得ていないと思いますが、それなりの収入を得て家族がいながら暮らしていけるということは、きっちりと海の資源に頼って暮らしているという根拠になると思っています。

余談になりますが、海女さんの家の冷蔵庫をのぞかせていただくと、おいしい物がたくさん入っています。一番おいしいものは、海女さん達は自分たちで食べています。農業のように一番おいしい物を売るという精神はありません。海女さん達には、自分達も楽しみながら暮らしていこうという精神があります。そんな暮らし方の素晴らしさをもっと語っていかないといけないと思います。先程、和田さんも「楽しい」という事を語らないといけないと言っていました、まさにその通りだと思います。今回のような交流の場を作らせていただくことで、最近みなさんが非常に語り出したという感じがしています。これから、もっとそれが続いていくと、楽しい若い人たちも参画してくれるだろうなと思っています。

あと1点だけ。廣田さんのおっしゃった中で非常に大切だと思う点があります。海女漁というのは、何千年も続いているすごく長い伝統を持っています。その中で、段々と約束事等が作られていったのは、多分100年から150年位の間だろうと私は思っています。要するに、持続的な方法にするために、獲り過ぎないような規則を作っていました。一日に何時間以上潜らない、寸足らずを獲らない等、たくさんの規則があります。私は、それはそれでいいと思いますが、今度は新しい時代に対応して、みんなが一斉に同じ時間に獲るという方法を少し変えてみてもいいのではないかなと思っています。ただし、それはトータルとして資源が枯れないような考え方を元にした方法でなければいけないと思います。

今、海女漁業の中には操業規制という考え方は全くなく、資源をどこまで獲れるかという考え方が主流です。これに関しては、ここにもたくさん研究者の方が

おいでになると思いますので、ぜひ、その方たちにお話ししたいと思います。いかにその水産資源を守っていくのか、海女が対象とする水産資源の総量と、それに対してどういう漁獲をすれば良いのかという研究を、ぜひ、研究者の方、やっていただきたいと思っています。それに対応して、先程のお話のように、海女さん達の時間があいたら、ちょっと行って獲れるというやり方を、今の思想の中で活かして作れないか、何か素晴らしい方法があるのではないかと考えています。

最後に、今日から明日にかけて、海女サミットの交流会がずっと続きます。海女さん達にお会いすると、いつもみんなが腹の底から笑ってですね、楽しい語りがずっと続くんです。こういう楽しい海女さんの暮らしの在り方というのは、私はどうしても残していかないといけない、それが、地域社会をずっと続けていく一番大きなエネルギーだと思っています。本当にいつも海女さんに感謝しています。

【塚本】

ありがとうございました。

これまで様々な立場から後継者問題についてご発言いただきましたが、海女さん達はどのようにお考えなのか知りたいものでございます。

今日は会場にたくさん海女さんいらっしゃっていますが、今回は鳥羽志摩の海女さんを代表して、鳥羽市の離島、答志島から、幅広くご活躍いただいている濱口ちづるさんに来ていただいています。色々言いたいことはおありでしょうが、まずは今のパネリストの方のコメントについて、感想をいただければと思います。

よろしくお願いします。

【濱口】

みなさんこんにちは。答志島で海女をしております濱口です。よろしく申し上げます。



みなさん端的にお話されていまして、1時間喋りたい所を2~3分でお話したいと思います。私は海女なので難しいことは全然分かりませんが、ちょっと気になったことを何点かお話をさせていただきたいと思っています。

私は、高校卒業後、結婚、子育てをして、働きたいと思った時、そこに海があったから海女をしています。幼い頃から素潜りは遊びとしていましたから。

先程のお話の時には、私の母や叔母達は、私と違い中学校卒業後すぐに海女になり、キャリアが違うなあと思いながら聞いていました。私と、母や叔母達とは海女としての形が変わってきていることにも気付かされました。

海女が多くの発信をする必要があるということはずごく共感しました。私もこうして立たせてもらったり、他にも様々な所に行かせてもらったりして海女の話を見せていただいています。それはやはり、海女のことを知ってもらって、みんなに「いいね。」って言われて自分のやりがいや、よい海女の環境をつくる為、みなさんに「いいね。」をしてもらうことも必要かと思っています。

もちろん自分達が獲った物のブランド力をあげたいということも願っています。

先程パネリストの方々の言われたことを、全部総合してやっているのかなと改めて感じさせていただきました。

【塚本】

ありがとうございました。これからディスカッションに入らせていただこうと思います。

石原さんのご報告と4人のパネリストの方々のお話と、今の濱口さんのコメントを合わせると、大きく2つのことが合意できていると思います。

ひとつは、とにかく海女の実態をもっとみんなで発信すべきであるということです。植地さんからもご指摘がありましたが、「あまちゃん」の様な海女さんにだけ憧れて来ると地域には根付かない。海女漁の難しさも含めて、海女さんの実態を発信していく必要があるということ。同時に、やはり、石原さんのお話にもありましたように、海女さんの魅力や楽しさ、自然の中での生き生きとした暮らし方、そういった魅力をもっと発信する必要があるのではないかと思います。そのことが、今の海女さん達や、海女さん達の予備軍となる若い女性達の意識改革になるのではないかと思います。

もうひとつ大事なことは、多数の方からご指摘いただきましたように、海女さんを残すためには、海女さ

んの事だけを考え、残すというのではなく、彼女達が生活している漁村の成り立ちを考えねばならないのだ、ということです。海女さんを残さなければ、地域社会がなくなってしまうのではないかという指摘もございました。海女さんの問題を通して、地域社会を残していかなければならないということです。海女振興協議会もそういうスタンスでやっています。

そのような2つの点を前提としまして、やはり意識の問題が大きいと思います。海女さん達の意識と、周囲の海女さんに対する意識。まだまだ海女さんのことを、生き生きとした素晴らしい生業と認識していない傾向があります。今の海女さん達が自分の娘達に海女を継がせない原因のひとつとして、後継者となる若い女性の海女さんに対する意識の問題もあると思います。

また、地域社会の受け入れ方の問題もあります。先程、植地さんより畔志賀漁師塾のお話をいただきました。その塾のやり方を、他の地域へどれだけ普遍化できるかを考えると少し難しい点もあると思います。他の地域から来た人間をいかに受け入れるかにつきましては、地域社会の意識の問題が大きいと思います。

その点について植地さんいかがですか？

【植地】

基本的には、取組みを開始した時から普遍化していきたいという思いはあります。今後、担い手対策を進めていく上でも、この問題について整理が必要になってくると思います。ただ、地域毎にそれぞれの浜で、少しずつ違うルールもある中、地域に合わせて普遍化できる部分と、普遍化せずに地域の姿として必要なルールとを分けて、考え方を整理していく必要があると思っています。

【塚本】

地域の意識の問題としましては、他の地域から来た人間をどれだけ受け入れ得るのかということ。現役の海女さん方からも、新たに海女さんが参入するということは、それだけ自分の取り分が減ってしまう、という話を聞きます。そういった意識を、漁村全体の成り立ちという意識に変えていけるのかどうか、という問題があると思います。また、畔志賀漁師塾の事例も基本的には行政のバックアップを受けてやっておられると思いますが、その点に関してはいかがですか？

【植地】

行政のバックアップを受けてさせていただいた部分と、地元の意識がすごくありますので、それで立ち

上げてきたという面があります。

【塚本】

大きくこれからの課題としまして、2点挙げたいと思います。まずは、海女さん達自身と地域社会の意識の問題についてです。もうひとつは、女性の多様な働き方について。これは一人の女性のライフサイクルの中でどのように働くかということと、海女さん達が海女漁だけをやって生きていくわけではなく、様々な仕事を含めてやっているということです。意識の問題と、働き方の多様性という問題を、2つ論点としまして議論していきたいと思います。

その前に、畔志賀漁師塾のお話でもありましたように、やはり、バックアップとして行政の働きが必要になってくると思います。その点に関して、和田さんと廣田さんそれぞれコメントいただけますでしょうか？

【和田】

行政のバックアップということに関してですが、私は、行政で働いていた人間として、また、こちらの地域を見させていただいている人間として、必要だと思っています。

2つの観点からということでしたが、ひとつは、地域の中で暮らしたいという人、この地域が好きで暮らしていきたいという人をバックアップしていくことだと思います。子育て支援や移住の支援等になると思いますが、鳥羽市や志摩市等の行政でも、現在様々な取組みをされていると思います。

もう一つは産業としてお金を稼ぐ、収入を得ていくという部分です。担い手を増やすという点ですが、産業政策としてどう進めていくのかという問題ですね。これもひとつ論点としてあると思っています。担い手の確保や商品開発、販売支援等、様々な問題があると思います。

今後、地域の中で様々な試行的な取組みも進んでいくと思います。そういう部分に対して、行政としてどのようなサポートをしていくのかということがひとつの論点だと個人的には思っています。

【塚本】

ありがとうございます。廣田さん、女性の働き方という視点も含めて、コメントいただけますか？

【廣田】

いわゆる男性社会においては、ある企業に入社したら、順番に出世して、定年を迎えるというのが普通で

す。しかし、女性というのは色々な価値観があって、結婚する人も出産を選ばない人もいますが、結婚を経て出産を経て、何人か子どもを産んでという中で、その転機毎に様々な考えが浮かんでくると思います。その時々によって、自宅に近い所でとか、在宅で等、多様な働き方をして、自分も社会の一員として役に立っているということを実感したいと思う人は多いと思います。

身近にいる県行政としましては、具体的にはまだ想定できてはいませんが、そんな女性の多様な働き方を実現できるような側面支援やバックアップをするという役割があるのかなと思いました。

【塚本】

力強いお言葉ありがとうございます。

先程いくつかの論点がありましたが、海女さん達が自分の子どもを海女にしたがらないという意識の問題や、地域社会がどのように新しい海女さんを受入れるかという問題があります。

川又さん、そのような事を含めましてもう一度ご意見をいただけますか？お願いいたします。

【川又】

70歳代や80歳代の海女の方々にお話を伺ったところ、自分達は、仕事の選択肢として海女しかなかったということでした。彼女たちは、海女漁がすごく良かった時期も知っているし、逆に辛い時期も知っています。そのような方々は、自分の子どもや孫の世代に、自分と同じ経験をさせたいと必ずしも思っていないそうです。

でも、それだけではなく、母や祖母の姿を見て、海女になった30~40歳代の方もいらっしゃいます。

このように、画一化した考え方ではなく、様々な考え方や経験があって、そのような発言や経験になると思います。先程、廣田さんのお話にあったライフステージの話になるかと思いますが、何歳代に何をするかということで、当事者の意識も変わってくると思います。また、石原さんからお話いただいた学歴の問題、あるいは私が最初に申し上げたように、今そこにある仕事が海女だったという理由で始められた方と、後から海女になりたいという気持ちで始められた方とで、それぞれの意識に差はあると思っています。

【塚本】

では、現役の海女さんに聞きたいと思います。

一番の問題は後継者という場合、自分の娘の場合はスムーズに海女になれると思いますが、植地さんたち

が取り組んでおられるような、外部の人を海女さんとして受け入れる場合には、やはり地域社会としても個人の海女さんとしても、自分の取り分が減ってしまう、あるいは、自分たちの集落の在り方を変えられてしまう、というような警戒心や抵抗というのがあると思っています。一方で、それをずっと拒否していけば、漁村の成り立ちという点では、非常に危うくなってしまいます。不安定になってしまう。そういうジレンマがあるのではないかと思います。

そういった点について、答志島の海女さんとして濱口さんお願いします。

【濱口】

個人的な意見になりますけれども、新しい人が外部から来ること自体は、全く不安とは思いません。自分の取り分が減るという意識はないんです。ここは私の所とか、ここからここは私たちの物などという意識はありません。海中の獲物はどれだけあるか分からないので、私達には取り分が減るという意識はないと思います。ただ、漁協さん関係になってくると、ルールのこと等になると思いますので、そういう意識もあるかもしれないと思います。海女自体にはそういう意識はないと思います。

ただ、やはり、その地区の海に独特のルールがあります。私の島は、答志と和具と桃取の3つの地区があります。私がもし、例えば和具地区で漁業権取って磯に入りなさいと言われても、行く勇気はないです。地域で根付いた生業のやり方が全然違ってきますし、風習等も全く違います。やっぱり、そう思っている自分達が、外の人達をちゃんと受け入れられるか、「楽しい海女にあなたも明日からなれるよ。」って言えるかと言われたら、それは多分難しいと思います。でも、そういうことをやっていく必要があると意識することで、海女の文化や楽しさ等は伝えていけると思います。外部の人の受入れにはやはり時間がかかると思います。

先程言ったように、10年後20年後を見据えた場合には、そういうことも必要なんだよということを、今自分たちが意識するかしないのかで、今後が変わっていくのかなと思います。

【塚本】

海女さん達ご自身は、よそから入ってくる方々の姿勢次第では、十分に受け入れられる。むしろそれは制度、あるいは、漁協の方の問題だご指摘がありましたが、植地さん、それに関してはいかがですか？

【植地】

今、濱口さんがおっしゃったことは、常々感じていることです。先程の地区を例にあげると、その地域の海女さんの神事に出ないという方がいました。そういう方に関しては、やっぱり最終的には、この地区で漁業を続けていけないということになりました。ですので、地域のルールがあり、当然、外から入りたい方も実際の中身は分からなくてもいいと思います。

先を見た時に、浜のみなさんがどのように考えていただけるのかという点が、私達が今やっているような取組みの中で非常に大切ですし、その中で足りない部分を何とか補っていくという、そういうような感じで私達は担い手対策の仕事を受け止めています。

【塚本】

ありがとうございました。

そういった認識がどんどん広がっていけば、畔志賀漁師塾でやっているような取組みも、もっと広がっていくのではと思います。

【川又】

私が申し上げた部分で、足りなかった点を1点付け加えます。

ミキモト真珠島における、先輩から後輩への技術の伝承についてお話をしました。一方、志摩や鳥羽で新しく海女になられた方にお話を伺った際、親類縁者でないにも関わらず、自分が海女になりたいと言って入っていった時に、ベテラン海女のグループの方々が、受け入れてくださって、丁寧にさまざまなことを教えてくださったという話も現実にあります。

地域全体という形ではないかもしれませんが、それぞれの地区でそれぞれの受け入れ態勢は、個々の形ではすでに進められていて、一定程度、技術の継承を含めて、外部の方の受け入れや技術の伝承も、なされている状況もあると思っています。

【塚本】

では、もう一つの論点であります海女さんの多様な働き方ということについて、議論させていただきたいと思っています。

濱口さんの所は、漁期は60日位でしたっけ？海女の漁期は年間で限られていると思いますが、濱口さんは、漁期以外の時期は、何をされていらっしゃるのでしょうか？

【濱口】

私は「島の旅社」という島のかあちゃんが活動して

いる所で働いています。

基本的には、海女で食べていくというのは無理だと思います。もっと簡単に海女が続けられてほかに収入が得られれば私の周りにも海女になる人がいると思います。先程のお話を聞いていてピンときたんですけど、「年金海女」というのがいいかなと思いました。年金をもらえるようになったら、そういう働き方もできると。じゃ私80歳まで海女できるわというように思いました。

【塚本】

私は江戸時代の歴史が専門ですが、江戸時代の海女さんも海女漁だけで一年間暮らしていたわけでは決してありません。季節によっては、畑をやったり茶摘みをしたり、あるいは林業をやったりして、それで年間トータルとして漁村で働いていました。それが本来の海女さんの暮らしではないかと思っています。また、夫が働いていますから、その中で、女性が無理をせずに働き、自然に逆らわずに生きている。それが、資源に優しい働き方にもつながっていると思います。そういった面も、もっと発信する必要があると思っています。

先程の話にもありましたように、海女漁だけで生活が成り立たないとすれば、年間で海女漁以外の仕事を確保することが必要になってくると思います。そういったことについて何かお知恵があれば、みなさんに出していただきたいと思っています。

和田さん、先程海女さんのブランド化という論点を出されていましたが、少し補足をお願いします。

【和田】

鳥羽志摩地域でも、「海女もん」というブランドで商品を出しているという話も聞いています。こういうブランド化というのは、よく地域おこしなどで様々な所で様々な取り組みが行われています。

ひとつ例を挙げますと、これは結構新聞等に出ている有名な例ですが、島根県の離島にある、名前は海士（あま）町という男の海士の字を書きます。海士町の取組みを一つ紹介したいと思います。ここはまさに離島というハンデがありますが、その中で、島をまるごとブランド化しようというコンセプトを掲げて、島の地域資源、それに島の中の人と、さらには島の外の若い人材の力をつまみ合わせながら様々な新商品を開発しています。ホームページで見たら、海産物や魚介を使ったカレー等がありました。様々な新商品を開発したり、その中で新しい雇用を生み出したり、あるいはまた、移住者もよんでいる。そんな取組みもされているようです。

今日のコメントの中にも少しありましたけれども、よそ者のアイデアも活用していただければと思います。そういう地域ぐるみの商品開発と、よそ者のアイデアとを、ぜひ活用していただきながらのブランド化というものを、期待したいと思っています。

先程も言いましたけれども、この地域には宝物というか、財産がたくさんあると思います。みんなで、一緒にやろうという気持ちと、あとは行政のバックアップも必要になってくるかもしれませんが、ぜひ、そのあたりを、頑張ってもらいたいんじゃないかなと思います。

【塚本】

地元だけではなく、幅広く外からのお知恵もお借りしながら、存続を図りたいと思っています。

働き方の多様性、色んな労働力の創出という点に関して、廣田さん、何かございませんか？

【廣田】

企業を中心とした話になってしまいますが、最初から繰り返しておりますように、海女さんも時間が空いた時に働けるというような仕事、近所でそういう仕事を紹介するというようなことはできませんが、社会全体がそういう受け入れ態勢になっていけばいいなと思っています。そこで、行政がどこまでお力添えできるかわかりませんが、働く女性の一人として、一個人としましては、そういう空いた時間にこういう所で仕事ができるみたいな、それがみんなを受入れるような体制になったらいいなと感じています。

行政マンとしての答えではないので、申し訳ないですが、すみません。

【塚本】

私は、個人的にはそういったことも、行政としても考えていく必要があるのではないかと考えています。

石原さん何か全体としてのコメントはありますか？

【石原】

今の問題につきましては、最近、私もどこかで聞きました。複数の複に業で「複業」。そういう在り方があるのではないかと考えています。海女さんもそれに類した考え方で、考える必要があると思っています。

実際に鳥羽の海女さんを見てみると、先程申し上げたように、漁業で得ている所得というのはそんなにめちゃくちゃ多くないと思います。その他に農業もやっていたら、民宿でも働いている。あるいは、全然違っ

たこともやっている。トータルとして仕事をしているという在り方があります。海女さんは海女漁が専業だという考えただけは、どうしても捨てていきたいと思っています。

今日いらっしゃっているかどうかは分かりませんが、千葉県の場合は、最近、冬は磯が全部ストップになりますから、冬に海でやる仕事なくなります。その場合には、他の仕事をしようということで、海女さんの中の多くは、花卉（かき）栽培というお花を作っている方もいらっしゃいます。一人確かいたと思いますが、冬の漁期のいい間は漁をしていて、それ以外の期間は海女をやめて、うちに帰って、イラスト等で稼いでいる等、全然違ったことで稼ぎを作っている人もいらっしゃると聞きました。非常に、複数の色んなことをやっている。逆に言うと、縛られていない自由さというのが、海女さんの中にあると思います。

それを活かせる考え方というのを、これから、みんなでバックアップしながら考えていく、作り出していく必要があるのではないかと考えています。

【塚本】

「複業」というキーワード、あるいは自由な働き方というのが、非常にいい言葉だなと思いました。

ここで、安倍昭恵さんに一言メッセージをいただこうと思います。日本のファーストレディーが、なぜ海女さんに？と疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、安倍首相の地元が、山口県の日本海側も含みまして、海女漁が盛んな所です。安倍昭恵さんは、海女さん達が働く海岸の清掃等にも熱心に参加されていると伺っています。

海女さん達への応援メッセージを一言お願いいたします。

【安倍】

今日は参加させていただきまして、ありがとうございました。



山口県にも海女さん達がいらして、今回、山口県からも何人か参加されていると思いますが、ぜひ一緒に行きましょう、という風に誘っていただきまして、初めて参加させていただきました。

今日お話を伺っていて、海女サミットではありますが、女性の問題であったり、地方の問題であったりと、今日本が抱えている大きな問題が全て集約されているのではないかと感じました。主人は女性が輝く社会をとということを行っていますし、また地方創生ということで、石破地方創生大臣が誕生したということもあり、これから海女さんが活躍していただくと、日本の明るい未来につながるのではないかなという感じがしながら聞いていました。

先程、和田先生が言ってらっしゃいましたけれども、その地域に住んでいると、意外と見過ごしちゃうもので、宝物ってものすごくたくさんあるんだろうなと思ってます。私も色々地方にまいりますけれども、楽しいことが一番大切なんじゃないかなと今、感じています。海女さん達はすごく明るくて、楽しい方だということも先程もお伺いしましたので、今日の懇親会の席等でもゆっくりお話を伺わせていただきたいと思います。

私は、多様な社会が豊かな社会だと思います。今、みんなが都会を向いていて、都会に出て、学校を卒業すればみんなが大企業を目指して働くというのはいびつな社会だというふうに思っています。大学を卒業しても、その後の職業の選択肢として、農業があっても、漁業があっても、海女があっても、そんな社会になったらいいなと思いますし、むしろ、私は、これからは地方の方が豊かで都会の人が憧れる地域になるのではないかと、そうしていかななくては、日本は終わってしまうという風に思って、今、地域の若い人達を色々な所で応援しているところです。

もちろん、海女さん達あるいはその地域社会が、いかによそから来るような人を受け入れるか、後継者をどう育てるかという事を、考えるのは大事なんですけれども、もう、あんまり考えていても、時間がないと思うんですね。もうやるしかない。とにかくアクションを起こす。さっき浜に行ってみて、「あ～！私も潜ってみたいなあ。」と思ったんです。体験してみましようよというような事を言ったら、結構集まってくる方もいらっしゃるんじゃないかと思えます。私も田植えをやっていて、田んぼの人出が足りないから来てというと、意外とみんな体験したくて集まってくれます。

今、都会のビルの中で働きながら、自分は歯車のひとつではないかと思っ、立派な仕事をしている気にな

りながらも、うつ病になってしまったりするような人達はたくさんいるので、そんな人達が移住してきているケースもたくさんあります。でも何をそこで職業にしていくか分からない人達に、職業の選択肢のひとつとして、女性たちに海女という仕事があるということを知らない人もいると思いますので、私も各地で宣伝をしたいなと思いますし、また何か体験させていただけることがあれば、色々な人達を連れて、海女体験ツアーみたいなのができたらいいなあと思いました。

今日は本当に参考になるお話をみなさまありがとうございました。これからも海女さん達のために、私は何ができるか分かりませんが、応援をしていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

ありがとうございました。

【塚本】

素敵なメッセージをありがとうございました。

安倍昭恵さんはダイビングをされるそうで、今度はぜひ、海女さん達と一緒に潜っていただければと思っています。また海女さん達がいかに楽しく元気な方々であるかということは、後の懇親会でたっぷり味わっていただけたらと思います。

海女さんの活躍こそが、日本の未来を明るくするという素敵なメッセージで終わることができるのを大変喜んでおります。

ありがとうございました。



